

人間関係づくり 英語教育の軸に

小学校の英語必修化 2011年度からの新学習指導要領の全面実施で、5、6年生の外国語活動(年間35単位時間)が必修化された。教科ではなく、音声を中心に外国語に親しんで言語や文化への理解を深め、コミュニケーション能力の素地を養うのが狙い。

春日井市の小学校教諭の児童英語教育が、国際舞台で認められた。英国国際教育研究所(ロンドン)の「国際言語教育賞」を受賞した神屋小教諭の加藤拓由さん(44)＝同市妙慶町＝だ。国による昨春の五、六年生必修化より五年も早く英語指導に取り組んできた加藤さんは「実践を生かし、現場の先生たちを支える側としても力を注ぎたい」と意気込んでいる。(谷知佳)

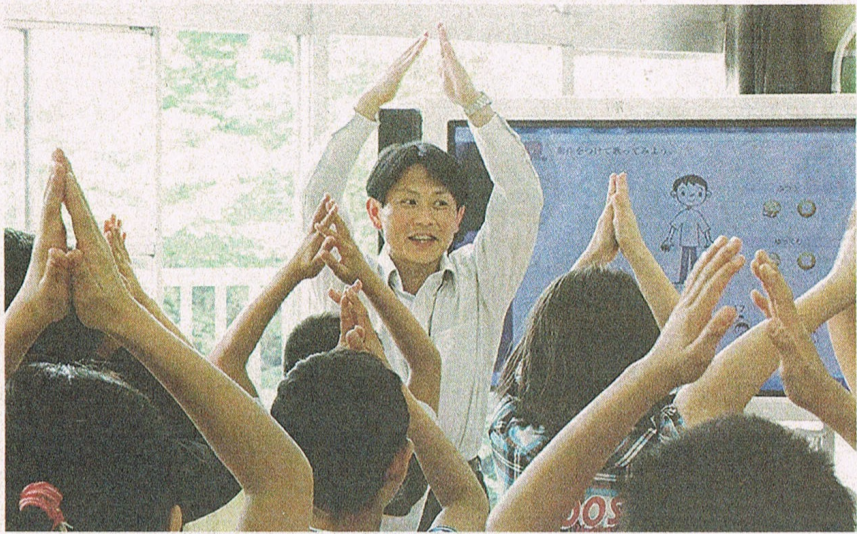
小学校での英語教育 誤の連続だった。神屋小に赴任した六年は、全国的にも手探りで「定型的な手法や決定打はない」と加藤さん。東京外国語大中国語学科を卒業後、中国残留孤児の二、三世が学ぶ日本語学級の担当や英語教諭として中学校に勤め、インド・ムンバイの日本人学校でも四年間教えた経験を術に偏らず、遊びだけで持つが、それでも試行錯誤もなし「人間関係づくり」を主眼にした授業にたどり着いた。ポイントには、コンタクト(触れ合い)、コミュニケーション(伝え合い)、コネクション(つながり)の三つが「CC」だ。二人一組で背中合わせに立ち、向かい合つと同時に「レッド」「ブルー」など自分の好きな色を言い合い、合致するとハイタッチするゲーム。相手が一人で授業をこなしての目の動きや気持ちを押さえて出方を読まなければならぬ懇親会定番の「たけのこニョッキゲーム」も、数字を「ワン」「ツー」などと英語に置き換えて取り入れられた。落ち着きのないクラスや、年頃の男女特有の気まずい空気にも変化が表れた。「入学以来、学校では親友以外の人と会話することができなかったが、外国語活動の時間はなぜか積極的に、ジェスチャーや口パクで友達とコミュニケーションを取り、卒業目前に突然、話し始めたケースもあった」という。

必修化に先行努力に光

「直接、何か役立ったわけじゃないけど『友達と話してみたいなあ』と思うきっかけになった」というこの児童の言葉に、小学校の外国語活動は「ことばのとびらを開くかき」と気付いた。今春から教務主任となる

二人一組で背中合わせに立ち、向かい合つと同時に「レッド」「ブルー」など自分の好きな色を言い合い、合致するとハイタッチするゲーム。相手が一人で授業をこなしての目の動きや気持ちを押さえて出方を読まなければならぬ懇親会定番の「たけのこニョッキゲーム」も、数字を「ワン」「ツー」などと英語に置き換えて取り入れられた。

英機関「教育賞」加藤教諭(春日井)に聞く



音楽に乗って体を動かしながら子どもたちに英語を教える加藤さん(左)＝春日井市神屋小で

「CC」だ。二人一組で背中合わせに立ち、向かい合つと同時に「レッド」「ブルー」など自分の好きな色を言い合い、合致するとハイタッチするゲーム。相手が一人で授業をこなしての目の動きや気持ちを押さえて出方を読まなければならぬ懇親会定番の「たけのこニョッキゲーム」も、数字を「ワン」「ツー」などと英語に置き換えて取り入れられた。

手遊び交え英語楽習



加藤拓由さん

海外で活躍する日本人教師を養成する英国国際教育研究所(ロンドン、図師照幸所長)の二〇一一年度「国際言語教育賞」に、愛知県春日井市神屋小学校教諭の加藤拓由さん(44)が選ばれた。世界各国の教育関係者・団体が対象の賞で、児童への英語教育の実績が認められ、応募者二十二人の中からただ一人受賞した。

春日井の小学校教諭・加藤さん 英の研究所が「教育賞」

英国の公的試験センター業務も担う研究所は〇八年度から、二万字以内の実践報告や出版物などで審査し、日本人の大学教授や学校教師らを表彰してきた。加藤さんには「英語のスキルだけでなく全人教育の視点で捉えた点を評価した」という。加藤さんは東京や春日井市の中学校で英語教諭を務めたり、インド・ムンバイの日本人学校で四年間教えた後、六年前に神屋小に赴任すると英語指導を担当。昨春の国による五、六年生の必修化に先駆け、手遊びやゲームに英語を組み合わせて関心を高め、今後の児童英語教育に生かされたい」と話している。